博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	金澤　淳子
論　文　題　目	「斜めの誠実」――南北戦争とエミリ・ディキンスン

審査要旨

合衆国の文学批評における歴史主義の復権によって、それまで等閑視されてきたディキンスンと南北戦争という問題が、1980 年代以降、ディキンスン批評のひとつの焦点となり、今日に至っている。南北戦争期にディキンスンの詩的想像力が頂点に達した事実を、必然と捉えるのがいまや主流であり、戦争は詩人の創造過程を解明する鍵と目されている。

本論文は、詩人自身が南北戦争を評した「斜めの」（“oblique”）という語に着目し、戦争に対するディキンスンのきわめて特異な姿勢と、詩人としての成熟を目指す「内なる戦い」との関係について、この間に出た膨大な数の先行研究のうち、一方で多く（特に Shira Wolosky, Faith Barrett, Eliza Richards, Cody Marrs）に拠り、他方で若干（Christanne Miller ほか）を批判しながら、多角的に考察したものである。独自の特色としては、作品の流通形態（新聞への掲載、知人・友人間での回覧、非公表）がそれぞれ持つ意味を比較・考察していることである。

論文概要

（序論）外の世界に無関心な孤高の詩人像が主流であった 80 年代以前には、「ディキンスンと戦争」という取り合わせは撞着語法的な印象を与えた。80 年代になると、「隠遁詩人」像を覆し、戦争との関わりを強調する研究が続々と登場する。ディキンスンの破格の詩が南北分断を反映すると論じる Wolosky、フレイザー・スターンズの戦死に一章を割く St. Armand、北軍支援の新聞に 4 篇の詩が掲載されたことを発見した Danduland 等々。その一方でディキンスンの詩的霊感は戦争報道のレトリックや堕落した表現に抵抗したとする Benfey の反論がある。21 世紀に入り、批評動向が変化し、それまでの詩に現れる戦争を詩人の内面の表象とする解釈（Aaron 等）から、“public”な詩人としての側面を論じる解釈（Marcelin）へと転換しつつある。

（第 1 章）ヒギンスン宛の最初の手紙を再考する。フレイザー・スターズが戦死し、アマストの町中が動揺したひと月後にヒギンスンに手紙を出したのは偶然ではない。ディキンスンは身近な知人友人が戦場で倒れるなか、その場限りではない永遠の意義を持つ詩をいかに書くかという問題を突き付けられ、真剣に詩人としての意識を持ち始めた。詩人論、詩論と取れる詩をいくつも書き、詩人としての在り方を模索しているのも偶然ではない、と論じている。次に、ヒギンスン宛 7 通目の手紙における戦争を”an oblique place”とする表現について、“oblique”は戦争から信仰までを含め、未知のもの、把握不可能なもの、受け入れがたいものとの向き合い方を示す語として解釈すべきであるとし、それとは対極的な、世間一般の戦争への向き合い方として、宗教界、政界の戦争を正当化するレトリックを紹介する。そのようなレトリックへの抵抗（換言すれば「斜めの誠実」“oblique integrity”）を示す詩として F 243 を論じ、前半部が手元に残され、後半部が戦場のヒギンスンに送られたことから、戦いに関わる詩をどこまで人と共有するつもりであり、またどこまで共有を差し控えるつもりであったのか、その境界線を示す重要な例と論者はみなす。

（第 2 章）北軍支援の新聞に戦争とは無関係な詩が掲載・転載されることを黙認する一方で、手元に残した戦争を扱った詩においては、ディキンスンが戦争を正当化する支配的言説（Benfey の言う戦争報道のレトリック）にいかに抵抗したかを、他の詩人・作家の作品と比較しながら論じている。

（第 3 章および第 4 章）この論文の中核をなす部分である。前章に引き続き、友人知人に送られた結果、戦争とは無関係な内容ながらも戦争中に新聞雑誌に掲載された詩と、戦争に直接言及しながらも友人知人に送られず、手元に残された詩について、作品分析に注力して考察している。その序として、第 3 章前半では当時の出版文化のなかでの詩の位置づけを確認している後半では、詩が友人知人に送られた結果、新聞雑誌に掲載・転載され、未知の読者を獲得していった可能性を論じる。戦争とは無関係な内容の詩が、転載を重ねるうちに、詩人の意図を越えて、新たな意味を獲得し、激動の時代に生きる人々に寄り添う声となった、と論じている。この見解

氏名　金澤　淳子

には先行研究にはない、独創性が認められる。第 4 章では、友人知人に送られなかった戦争に関わる詩および苦悩を主題とした詩を詳細に分析し、戦時の支配的言説や宗教的言説（「時代の潮流」、「戦場や来世についての常套句」）そして伝統的なエレジーの言説とも著しく乖離していることを論じている。回覧しなかったのは、支配的言説に回収されることを回避し、自己の懐疑に忠実な姿勢を保って、内なる「真正の声」を求め続けたからであるとしている。啓発的かつ妥当な結論である。この章における作品分析は、記述にややぎこちない面があるものの、内外の一定水準の研究に比べても遜色がない。

（第 5 章）戦前に書かれた「戦いの詩」4 篇を論じている。最初期の戦いの詩と、同郷・同時代の著名な作家ヘレン・ハント・ジャクソンの類似の詩との比較では、その微妙な、しかしながら決定的な差異が、読者（出版）を意識するか、あるいは自己の内面を優先する（「斜めの誠実」）か、という姿勢の相違から生じているとする。引き続いて「逆説の展開」が際立つ戦いの詩 3 編を取り上げ、ディキンスンが作家としての栄光や成功を度外視し、人知れぬ内なる戦いについて書くことを詩人としての本領としたことを論じている。

（第 6 章）ディキンスンとソローの関係を論じている。ジョン・ブラウン処刑（1859 年）の直前に観測された流星(meteor)現象を、ソロー、ホイットマン、メルヴィルらは殉教者(martyr)・ブラウンと結びつけた。ディキンスンも 2 年後の回覧・出版されず手元に残された詩（F 187）で“martyrs”と“meteor”の隠喩を意識的に用いている。論者は、支配的な martyr-meteor 言説とディキンスンの隠喩の違いに着目し、殉教者詩人を取り上げたもうひとつの詩（F 655）を合わせて論じながら、一方の殉教者が同時代の人々の記憶に名前を残すのに対し、ディキンスンの殉教者は人知れぬ内なる苦悩を作品化することによって、未来の読者に「平和・安らぎ」（“peace”）を送り届けるのだと論じている。なおこの章には、ソローの日誌におけるブラウンへの言及と自然観察の記録の関係についての鋭い洞察が見られる。

（第 7 章および結論）内容的には第 7 章と結論を合わせて、この論文のまとめとなっている。戦前に書かれた戦いの詩に特徴的だった勝敗にまつわる視点、敗者に寄り添う姿勢は、戦争中に書かれた戦いや苦悩を主題とした詩には見られなくなり、一方で、支配的な戦争言説に抵抗しながら、内面の戦いが一層深化させられる。それに従って詩が回覧される頻度も激減する。そういった詩人の劇的な成熟は、1864 年にひとつの区切りを迎える。内面の戦いの結果、詩人が到達したひとつの境地を示すものとして論者は、同年に書かれた、抽象語の使用によってきわめて空漠たる印象を与える 2 篇の特異な詩（F 824, F 839）を挙げ、経験不可能なもの、不可視なもの、不可知なものに、言葉を武器に敢然と挑む詩人の姿を見出している。（以上、論文概要）

本論文は論者が過去十数年にわたって各種の学会誌等に発表してきた学術論文に基づいている。ひとつの主題のもとに大幅に改稿し、再編してはいるが、情報の取捨選択や批評用語の効率的な使用にやや不十分な面もある。詩人のキリスト教に対する懐疑あるいは神義論（theodicy）の観点からの考察も十分とは言えない。また詩の解釈の細部で疑問を残す部分があり、先行研究に対する批判もやや粗雑である。しかしながら、ディキンスンが戦時の支配的言説（戦争報道のレトリック）に抵抗しながら、詩人としての内面の戦いにおいて、詩人自身が言うところの「斜めの誠実」を貫き通し、短期間に驚異的な成熟に達したことを、粘り強い作品分析を通じて説得的に論じている。ディキンスンの創作過程の秘密に迫る研究である。先行研究の参照は十分過ぎるほどであり、また中核をなす第 3，4 章における作品分析は、内外のディキンスン研究と比べても一定の水準に達している。南北戦争とディキンスンをめぐる、これだけまとまった日本語の論考はいまだ出ていない。日本のディキンスン研究において、先駆的な研究になると期待される。博士学位を授与するにふさわしい論文であることを認める。

公開審査会開催日	2018 年 1 月 27 日			
審査委員資格	所属機関名称･資格	氏　名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院　教授	江田　孝臣	アメリカ文学	
審査委員	早稲田大学文学学術院　教授	堀内　正規	アメリカ文学	
審査委員	慶應義塾大学商学部　教授	朝比奈　緑	アメリカ文学	
審査委員	獨協大学外国語学部　教授	原　成吉	アメリカ文学	